赤れんが庁舎守る八角塔

観覧ツアーガイドに挑戦

国の重要文化財の北海道庁赤れんが庁舎（北海道庁旧本庁舎、札幌市中央区）が、2019年12月から約5年半をかけて補強・修復した大改修から1年。中央にそびえるシンボル「八角塔」の内部を見学できるようになったのが人気で、この1年で70万人ほどが来場しました。札幌市のこども記者が八角塔の観覧ツアーを取材し、ツアーのガイドにも挑戦しました。

（文・嘉指博行、写真・東倫太朗）



震度7にたえる制振装置 屋根に

八角塔はてっぺんまで約33メートルでビル10階分の高さ。赤れんが庁舎は1888年（明治21年）の完成直後、一般公開に1日1万人を集めたといいます。ですが、当初の設計になかった八角塔を屋根にのせたため、大風にゆれ雨もりもひどく1895年（明治28年）ごろ撤去。1968年（昭和43年）に復活しました。

この庁舎を訪ねたのは西園小4年の桜田七海さん、手稲宮丘小6年の朝妻瑚之さん、円山小6年の太田優さん。管理運営する「北海道赤れんが未来機構」の荒木田康支配人と鈴木暁美さんが案内してくれました。

ここから展望バルコニーに出ると、明治期の発展を支えた主要道路の北3条通を見通せます。朝妻さんは「ビルとかさえぎるものがなく、いろんな所が見える。道がすごい」と感動した様子。

続いて予習を生かし「緊張した」というガイド体験へ。お客さんは京都からの女性ら3人。桜田さんは現在の八角塔は「50年くらい前にできました」と話し、明治の創設時には2階から八角塔の中へ。らせん階段を上り、筋交い（補強のため柱と柱の間になめに部材を入れたもの）がめぐらされた屋根裏に着きました。「明治からの木材も使い、昭和の復元と令和の最新技術で補強しています」と鈴木さん。

68段の階段を上り切ると街を360度見わたせます。今回の改修で屋根の内側に設けた、震度7にたえる制振装置を指さし荒木田さんは「八角塔は今では、地震のゆれを受け止め、赤れんが庁舎の姿を未来へ伝える役割を担っています」と教えてくれました。

「（火事などの）見張り台となり、（かかげた旗が）風の向きや天気予報を伝えていました」と説明しました。

窓にほどこされた星（五稜星）の意味を問われ、太田さんは「開拓使のマークです」と回答。ごばんの目のような札幌のまちづくりは「京都を参考にしました」と紹介しました。

ガイドをした感想は―。桜田さんは「赤れんが庁舎が大切なものだと知り、補強し受けついでいる札幌を自慢に思います」。太田さんは「自分の住む地域を知るとまちの価値が分かり、他の地域の人と話すときに生かせそう」。お客さんにも「子どもらしく新鮮で分かりやすい。率直に聞けました」と好評でした。





㊤八角塔の展望バルコニーでガイドをする、こども記者たち（右側の2人）。「自然が豊かで、すずしい」と北海道の魅力も伝えました

㊦赤れんが庁舎について荒木田さん（左）に教わった内容をガイドで伝えた桜田さん（中央）は「話をすることで、より理解できると分かりました」と実感していました



八角塔の屋根の制振装置を指さす荒木田さん（左はし）から説明を聞く（右から）朝妻瑚之さん、太田優さん、桜田七海さん

赤れんが庁舎は12月29日～1月3日と年1回の設備点検日（今年は11月15日）。入館料は一般300円などで中学生以下無料。八角塔観覧ツアーは小学生以上が対象で午前11時、正午、午後2時、同3時。1200円。

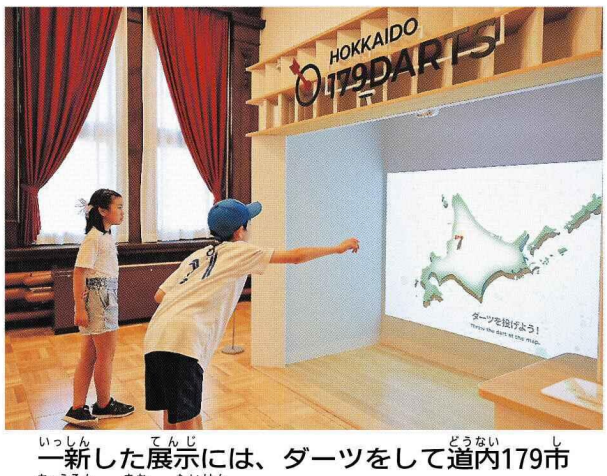
午前8時45分～午後9時開館、休館日は

展示一新 北海道の歴史にふれる

赤れんが庁舎は展示も一新。デジタルサイネージ（電子看板）など電子機器をふんだんに使い、北海道の歴史にふれる工夫がされています。桜田さんは「アニメやプロジェクションマッピングにしてくれて、楽しく学べる」と笑顔でした。

ダーツをして道内の自治体を知る体験も。北海道の形をした的に矢を投げると、当たった市町村のミニ知識が映像とメモ紙で出ます。179市町村の魅力を発信するコーナーでは競うように、まちの見どころや特産物を紹介しています。

「アイヌ文化と歴史」のコーナーで、床に描かれた、江戸時代のアイヌ語地名の北海道地図に見入った太田さんは「アイヌ語が残っている地名を探すのは面白そう」と話しました。



一新した展示には、ダーツをして道内179市町村を学ぶ体験コーナーもあります

まなぶんデジタルには、さらに多くの写真があります。10月2日夕方から見られます。